

令和元年6月21日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02207

研究課題名(和文) 帝国キネマ演芸から見る20世紀初頭の日本映画産業の様相

研究課題名(英文) Teikine and Early Film Industry in Japan

研究代表者

笹川 慶子(sasagawa, keiko)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：30339642

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は天然色活動写真株式会社大阪支店(以下、天活大阪)および、その後身である帝国キネマ演芸株式会社(以下、帝キネ)の活動を調査し、日本映画産業史に大阪を位置づけるとともに、帝国日本の映画産業をより包括的より多層的に捉え直すことである。具体的には西日本の重要な映画配給拠点だった大阪と九州、植民地の朝鮮や台湾などでの天活大阪および帝キネの活動を調査分析する。それによって大阪映画産業と西日本そして植民地市場との関係性を明らかにするとともに、帝国日本の映画産業をグローバルな視点から見直す。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の日本映画史は草創期の映画配給史をほとんど論じず、たとえ論じても東京中心の叙述にすぎなかった。本研究は天活大阪支店およびその後身の帝国キネマ演芸の映画配給網を調査することで、従来とは異なる事実を明らかにした。例えば九州そして台湾、朝鮮には大阪から映画(ときには弁士も)が配給されていたこと。九州は大阪映画産業の成長に大きな役割を果たしていたこと。また映画供給システム確立時期の違いから、台湾では国産映画製作がなかなか育たなかったのに対し、朝鮮では朝鮮人との間に競争や葛藤が起こっていたこと、などがわかった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to investigate the activities of the Osaka Branch, Natural Color Cinematograph Co., Ltd. (hereinafter referred to as Tenkatsu Osaka) and the activities of Teikoku Kinema Performing Arts Co., Ltd. (hereinafter referred to as Tei Kine) in order to placing Osaka in the Japanese film history and to make a more comprehensive and multi-layered view of the film industry in imperial Japan.

I will analyze the activities of Tenkatsu Osaka and Teikine specifically in Osaka and Kyushu, colonial Korea and Taiwan which were important movie distribution bases in West Japan. As a result, I will clarify the relationship between Osaka Film Industry and West Japan as well as the colonial markets, and also reconsider the Imperial Japanese Film Industry from a global perspective.

研究分野：映画史

キーワード：帝国キネマ演芸(帝キネ) 天然色活動写真(天活) 映画流通 映画配給 植民地 台湾 朝鮮 九州

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

従来、日本の映画史研究は映画の配給や興行より製作の側面　たとえば小津安二郎などの監督、『東京物語』などの作品、喜劇などのジャンル、蒲田などの撮影所　に着目することが多かった。そのため製作スタジオの集中していた東京と京都の映画研究は進むものの、映画製作スタジオのない地域は研究対象になりにくかった。よって映画製作の歴史の乏しい大阪も、西日本最大の映画消費都市でありながら映画史研究の対象とされることは稀だった。大阪に関するまとまった研究は東大阪市が1988年から1998年にかけて市史紀要として編纂した帝国キネマ演芸（以下、帝キネ）の三部作のみである。だが、それも東京在住の批評家による同時代評に依拠した偏った帝キネ像にすぎない。しかもその後、新たな研究があらわれることもなかった。

そうした状況において研究代表者は2012-14年度科学研究費助成事業「帝国キネマ演芸の総合的研究　映画史、地域関係史、国際交流史の視点から」で、帝キネがどのような状況で誕生し消滅したかを検証した。その結果、戦前のおお阪には撮影所が大小さまざま存在し、大量の映画を製作、配給、興行、消費していたこと、なかでも帝キネは1920年に設立されてから1931年に消滅するまで大阪最大の映画製作会社として活躍し、老舗の日本活動写真株式会社（以下、日活）や新進気鋭の松竹キネマ株式会社（以下、松竹）と肩を並べる日本三大映画会社のひとつとみなされていたことが確認できた。

また、同時代の東京在住の文筆家や批評家が帝キネに対する否定的イメージ　「大阪特有」、「二流」、「地方」　を抱いていたこと、しかし、それとは対照的に西日本地域では帝キネの作品やスターが絶大な人気を誇っていたことも明らかになった。さらに、国活や松竹、大活など日本映画革新を目指す同時代の他の新会社と分けて考えられてきた帝キネが、同時代的な価値観を共有し、植民地で積極的に市場開拓を行っていたことも明らかにした。

とくに興味深かったのは大阪の盛り場の見世物小屋や劇場が映画館に変わり近代的な視覚文化が醸成される過程で、帝キネの創設者・山川吉太郎が重要な役割を果たしていたことが見えてきた点である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、これまでの研究成果を踏まえつつ、帝キネの活動をより包括的、多層的に解析することである。それにより帝国日本の映画産業のなかに帝キネを位置づけることができる　と考える。そのため以下3つの観点から研究を遂行する。

まず、帝キネの前身・天然色活動写真株式会社（以下、天活）の大阪支社（以下、天活大阪）の配給である。天活は1914年に設立された会社で、天活東京と天活大阪の二つの会社がそれぞれ東日本と西日本の市場を分割管理していた。その天活の創設に尽力し、天活大阪の代表を務めていたのが、のちに帝キネを創設する山川吉太郎である。天活東京と天活大阪の関係は、いわゆる本社が支店をコントロールする主従関係ではなく、日本市場を東西で分割管理する姉妹関係に近い。だが、従来の映画史研究は、天活の歴史を天活東京と小林喜三郎を中心に叙述し、天活大阪と山川も含めた天活全体の活動を公平な視点から把握することはなかった。天活の活動全体を捉えるには、これまで研究の進んでいない天活大阪と山川吉太郎の活動を跡づける必要がある。

次に、同じ理由で天活大阪と帝キネの海外事業展開もより明確にする必要がある。これまでの研究で、天活大阪は朝鮮人向け映画館・団成社との提携による連鎖劇の製作や朝鮮映画人の技術教育などを行い、帝キネは同時代の日本で設立された同業他社に先駆けて朝鮮市場開拓に乗り出していたことがわかった。しかし、台湾での天活大阪と帝キネの活動はまだ解明されていない。そこで本研究では両社の台湾での事業展開を明らかにするとともに、それを朝鮮の事例と比較分析することで、日本統治下の植民地映画供給と西日本、そして大阪の帝キネの関係を浮かびあがらせる。

最後に、欧米企業と天活大阪および帝キネとの関係を調査し、グローバルな視点から両社の活動を分析する。具体的には天活とイギリスのアーバン社との関係、帝キネとアメリカのユニヴァーサル社との関係を調べ、天活大阪と帝キネはどのように欧米の新技术と向き合い、交渉を重ね、自らを変えていったのかを歴史的に考察する。

以上の調査分析の結果、最終的に本研究は戦前を代表する重要な会社であるにもかかわらず、これまでほとんど調査分析されてこなかった天活大阪と帝キネの活動に光を当て、その歴史的意義を大阪と西日本、アジア、欧米との関係において捉え直すことを目指す。それにより従来の東京-京都中心の日本映画史研究に一石を投じたいと考える。

3. 研究の方法

2015年度は『大阪時事新報』を網羅的に調査し、天活大阪と帝キネの上映記録をデータベース化する。また同時代の比較対象として、横浜の大正活映とアメリカのユニヴァーサル社の活動を調査する。

2016-17年度は関西大学所蔵の『台湾日日新報』、早稲田大学演劇博物館など研究機関が所蔵する史料、台湾の図書館が所蔵する史料を用いて日治時代の台湾における天活大阪と帝キネの活動について調査分析を行う。また帝キネの活動をグローバルな映画交渉の網目において捉えるべく、同時代のアジア主要都市での映画供給の流れとアメリカの対アジア市場意識ならびに活

動を調査研究する。

2018年度は天活大阪と帝キネの九州市場およびイギリスのアーバン社に関する調査を行う。また戦前の日本でアメリカの映画と技術がどう受容されてきたかを歴史的に調べる。最後は、これまで蓄積した研究成果を見直し、天活大阪と帝キネの活動を包括的、多層的に捉え直す。

4. 研究成果

2015年度は国内の一次史料を調査し、大阪における天活と帝キネの活動を跡づけ、データベース化を行った。また、帝キネの存在した時代の状況を国内と国外の両方から捉えるべく、帝キネと同じ年に横浜に設立された映画会社・大正活映の活動を調査、分析、比較するとともに、日本に初めて進出した外国企業であるユニヴァーサル社の活動を調べた。その結果、1920年代の日本映画産業はまだ分散的かつ流動的であり、映画産業が東京-京都に集中していなかったこと、日本映画市場のグローバル化が急速に進行していたことが明らかになった。

2016-17年度は日本と台湾の一次史料を調査し、日治時代の台湾における天活大阪と帝キネの活動を跡づけたうえで、朝鮮での天活と帝キネの活動と比較分析した。また帝キネの活動を世界の映画交渉の網目において捉えるべく、20世紀初頭のアジア市場での映画流通および配給をアメリカ商務省の史料やアジアの一次史料を用いて調査分析した。アジアの分析対象は台湾のほかシンガポール、香港、上海、マニラを取りあげた。それにより日治時代の台湾における天活大阪と帝キネの活動をアメリカとアジアの両方の視点から捉え直し、20世紀初頭のグローバル化するアジア映画市場の流れにおいて再考することができた。

2018年度はアジア市場での映画流通および配給の調査分析を継続するとともに、天活大阪と帝キネの拠点である大阪と、その重要な市場である九州、博多を調査分析し、それによって西日本での天活の配給機構を明らかにした。さらに天活とイギリス、アーバン社との関係、帝キネとユニヴァーサル社との関係、日本におけるアメリカの映画と技術の受容史も調査考察することで、天活大阪と帝キネをグローバルな映画流通の文脈位置づけることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 17 件)

笹川慶子「秋田実の漫才映画三部作 日本映画の転換期」『大阪春秋』第46巻第3号、大阪春秋社、2018年11月、36-39頁。査読なし

笹川慶子「パテ社とアジア映画供給網の形成 香港を事例として」『関西大学文学論集』第68巻第1号、関西大学文学会、2018年7月、1-34頁。<http://hdl.handle.net/10112/16263> 査読なし

笹川慶子「映画配給のグローバル化とアジア 香港映画市場形成 1896年-1912年」東アジア文化交渉学会第10回国際学術大会予稿集、2018年5月、91-106頁。査読なし

笹川慶子、北村洋「日本におけるアメリカ映画の受容」『ジャンクチャー 超域的日本文化研究』9号、名古屋大学大学院人文学研究科附属「アジアの中の日本文化」研究センター、2018年3月、132-146頁。査読あり

笹川慶子「アジア映画市場の形成と日台交渉」『東アジア文化交渉研究』11号、関西大学大学院東アジア文化研究科、2018年3月、195-211頁。<http://hdl.handle.net/10112/13199> 査読あり

笹川慶子「20世紀初頭のアジア映画市場形成と台湾」『海洋文化国際学術研究会論文集』国立台湾海洋大学海洋文化研究所、2017年12月、113-131頁。査読なし

笹川慶子「アメリカノ上海から見た中国映画市場 1896-1922」『浙江と東アジア国際学術研究会論文集』浙江工商大学東方語言文化学院、2017年10月、137-169頁。査読なし

笹川慶子「グローバル映画配給と中国 1896-1914 上海を事例として」『関西大学文学論集』第67巻第2号、関西大学文学会、2017年9月、1-32頁。査読なし

笹川慶子「パテ社のマニラ進出と映画館 マニラ映画興行史(1909-1910)」『演劇研究』第40号、早稲田大学坪内逍遙演劇博物館、2017年3月、1-22頁。査読あり
<http://hdl.handle.net/2065/00052172>

笹川慶子「映画配給のグローバル化 マニラ映画館史(1909-1914)」『関西大学文学論集』第66巻第3号、関西大学文学会、2016年12月、1-23頁。<http://hdl.handle.net/10112/10640> 査読なし

笹川慶子「20世紀初頭の環太平洋映画交渉 アメリカから見た中国と日本」『近代中国と東アジア-新史料と新視点』浙江工商大学東方語言文化学院、2016年11月、210-226頁。

査読なし

Keiko Sasagawa, "Teikoku Kinema Engei and Taiwan: Movie Screening at Yoshino-tei (Yoshino-kan) in Taipei under Japanese Rule," The 4th East Asian Island and Ocean Forum, October 4, 2016, 116-121. 査読なし

笹川慶子「帝国キネマ演芸と台湾 日治時代の芳乃亭（芳乃館）における映画興行」『東亜島嶼與海洋文化國際論壇』國立臺灣海洋大學人文社會科學院、2016年10月、122-127頁。査読なし

笹川慶子「アメリカ映画のアジア市場展開と日本の地政学位置 海外映画市場に関するアメリカ政府報告（1903-1919）の歴史的分析」『関西大学文学論集』第66巻第1号、関西大学文学会、2016年7月、63-91頁。http://hdl.handle.net/10112/10337 査読なし

笹川慶子「『Beautiful Japan』と近代日本の映画産業 東洋汽船の映画ビジネス」『東アジア文化交渉学会第8回国際学術大会予稿集』東アジア文化交渉学会、2016年5月、691-698頁。査読なし

笹川慶子「東洋汽船の映画ビジネス」『CSAC Discussion paper』第12巻、関西大学アジア文化研究センター、2016年2月、61-65頁。査読なし

笹川慶子「トム・D・コクレンとアジア ユニヴァーサル映画のアジア展開」『関西大学文学論集』第65巻第1号、関西大学文学会、2015年7月、131-157頁。査読なし

〔学会発表〕(計 17 件)

笹川慶子「活弁 LOVE ネオスーパー・トーキーと日本映画産業」Talking Silents: New Approaches to Early Japanese Cinema and the Art of the Benshi、2019年3月2日 於 Billy Wilder Theater, UCLA (アメリカ)。

笹川慶子「映画配給のグローバル化とアジア 香港映画市場形成 1896年-1912年」東アジア文化交渉学会第10回国際学術大会、2018年5月12日、於香港城市大学(中国)。

笹川慶子「20世紀初頭のアジア映画市場形成と台湾」第5回東亜島嶼與海洋文化國際論壇、2017年12月14日、於国立台湾海洋大学(台湾)。

笹川慶子「アメリカノ上海から見た中国映画市場 1896-1922」シンポジウム浙江と東アジア 新史料と新視点、2017年10月29日、於浙江工商大学(中国)。

笹川慶子「宝塚『暖簾』 戦後高度経済成長の大阪映画」大阪早稲田倶楽部史談会、2017年6月7日、於関西大学梅田キャンパス。

笹川慶子「アメリカノ上海から見た中国映画市場 1903-1917」東アジア文化交渉学会第9回国際学術大会、2017年5月13日、於北京外国語大学(中国)。

笹川慶子「日活『わが町』 織田作之助と川島雄三」大阪早稲田倶楽部史談会、2017年5月3日、於関西大学梅田キャンパス。

笹川慶子「松竹『春琴抄 お琴と佐助』 日本映画のサウンド化と関西弁」大阪早稲田倶楽部史談会、2017年4月5日、於関西大学梅田キャンパス。

笹川慶子「シネマトグラフ伝来 120周年 大阪から見る近代日本の映画興行」2017年2月15日、於梅田 Planet Studio + 1。

笹川慶子「大阪から見る近代日本の映画興行」大阪早稲田倶楽部史談会第241回、2017年2月1日、於関西文化サロン。

笹川慶子「20世紀初頭の環太平洋映画交渉 アメリカから見た中国と日本」シンポジウム近代中国と東アジア 新史料と新視点、2016年11月19日、於浙江工商大学(中国)。

笹川慶子「帝国キネマ演芸と台湾 日治時代の芳乃亭（芳乃館）における映画興行」第4回東亜島嶼與海洋文化國際論壇、2016年10月4日、於国立台湾海洋大学(台湾)。

笹川慶子「『Beautiful Japan』と近代日本の映画産業 東洋汽船の映画ビジネス」東アジア文化交渉学会第8回国際学術大会、2016年5月8日、於関西大学千里山キャンパス。

笹川慶子「大阪のまちの変容と映画館の関係を紐解く」大阪ガスエネルギー・文化研究所(CEL)、2016年2月28日、於大阪ガスNEXT21ホール。

笹川慶子「東洋汽船の映画ビジネス」関西大学アジア文化研究センター第37回研究例会、2015年12月25日、於関西大学千里山キャンパス。

Keiko Sasagawa, "What brought Universal Japan to Osaka? Asian Market and Distribution of American Films at the Beginning of the 20th Century," Association for Asian Studies in Asia, June 24, 2015, 於中央学術院(台北)。

笹川慶子「トム・D・コクレンの軌跡 なぜユニヴァーサル・ジャパンは大阪に誕生したのか」東アジア文化交渉学会第7回国際学術大会、2015年5月10日、於開成町福祉会館。

〔図書〕(計 5 件)

笹川慶子『近代アジアの映画産業』青弓社、2018年7月、1-645頁。

笹川慶子、増田周子、日高水穂、森勇太、Michael Cronin『近代大阪文化の多角的研究』なにわ大阪研究センター、2017年3月、1-73頁。

Keiko Sasagawa and Hiroshi Kitamura, "The Reception of American Cinema in Japan," *Oxford Research Encyclopedia of Literature* (literature.oxfordre.com), ed. Paula Rabinowitz (NY: Oxford University Press, 2017).

笹川慶子、松浦章『東洋汽船と映画』関西大学出版部、2016年9月、1-441頁。

笹川慶子『公益財団法人三菱財団助成研究日本映画雑誌所在調査報告書』上下巻、笹川慶子、2015年8月、1-1762頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。